OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞三輪正胤著『歌学秘伝の研究』
Author(s)	海野, 圭介
Citation	語文. 1997, 67, p. 43-43
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68906
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紹介

三輪正胤著『歌学秘伝の研究』

海野圭介

すでに二年が経過するが、三輪正胤氏の著書『歌学秘伝の研究』が上梓された。本書に先立ち発表された氏の諸論により、我々は、嘗て荒唐無稽の言葉のうちに一蹴されてきた秘伝書の類の成立と内容、相関や流伝の相を窺い、「秘密のある世界」（本書1頁）を垣間見てきた。本書は氏の一連の歌学伝授研究の集積である。

本書は、氏の最も早い時期の論文、「「竹園抄」歌論の生成と発展――歌神としての住吉明神をめぐって――」（名古屋大学国語国文学14　昭39・4）から近年の「『悦目抄』系歌論の成立をめぐって(一)・(二)」（国語国文59―7～8　平2・7～8）に至る十八篇の論文を基に、「歌学」における「秘密」の「伝授」（本書501頁）の史的展開を辿る形で再構成され、総体として書き下ろしの形をとっている。全体は、序章にあたる、秘密のある世界、第一章伝授の発生、第二章伝授の方法とそれによる分類、第三章灌頂伝授における流派と秘事、第四章切紙による伝授、第五章秘伝の背景、と分かたれており、第一・二章が史的展調の輪郭を捉える総論、第三～五章が各々の時代・伝書を俎上に上せた各論の形で綴られている。

何れも資料の緻密な読解に裏付けられた重厚な論であるが、就中、第三章第一節の、十三世紀後半を頂点とする氏が灌頂伝授期と呼ばれる時期の一歌道流派・為顕流を巡る諸論は、氏が早くから追求された課題であり、真骨頂が発揮されたものと言えよう。その成立に為家男・為顕の関与が認められる『竹園抄』歌論の分析から、『新撰帝説集』等の秘書の関与を解明され、成立背景を追う過程において、『玉伝神秘巻』、能基『古今和歌集序注』『古今和歌集灌頂口伝』類、等の生成と享受・流伝の様相を辿り、個々の伝書を相関させつつ生成過程を跡付けられる。更には、他流との接触をも想定され、家隆流、為世流、為実流等の諸流派集団の確立と『和歌灌頂次第秘密抄』『悦目抄』等の秘書の生成過程を考証される。個々の秘伝書、伝承者を文学史に位置付けつつ、総体として嘗て綴られざる「秘密のある世界」を照射される手法は正に見事である。

また同様に、第四章第二節の『八雲神詠伝』を巡る諸論も白眉と言える。素盞烏尊の〝八雲立つ〟の歌に発想されて成立した神道者流の秘伝書『八雲神詠伝』を吉田兼倶の制作にかかる仮託書とし、その根幹をなす概念が、東常縁・宗祇・その流と展開する伝授の中に組み込まれていく過程を跡付け、更に、宗祇と兼倶の相互依存的関係を明らかにされる。中世歌学伝授に吉田神道が深く介在することを解明し、神道という基底を示される手法は実に鮮やかであり、和歌文学研究のみならず、様々な分野に波及する問題を提起する。

当該分野においては、氏の成果の参観なくしては一歩も進み得ないと言っても過言ではない。時代の文化的基底としての学問・注釈の体系の解明という視点が提示され、その重要性が認識されつつある現在だけに、本書の意義は計り知れず、広く中世という時代とその文学活動を研究するものにとって必携の書となることは間違いあるまい。（平成六年三月刊　風間書房　五一八頁　定価二〇、六〇〇円（本体二〇、〇〇〇円））

――本学大学院博士後期課程――